

古代ローマにおける神々の戦争 ——キリスト教化への過程——⁽¹⁾

松村 一男

1. 神々の戦争としてのローマ宗教史

本稿では、都市国家ローマの成立から、共和政、帝政と時代を経て、強大化し、領土を拡大していったローマにおいて、宗教がどのように変化していったのかの見取り図を提示してみたい。もちろん、そうした変化には理由があるわけで、状態の変化を述べつつ、同時に変化の理由を述べていきたい。そして最終的にキリスト教という一神教が国教となるのだが、その理由も考えたい。これはある意味では神々とその信者たちによる一種の宗教戦争である。もちろん、神々や信者集団が殺しあうというのではない、共存もあったし、相互の影響や模倣もあった。しかしある種の神々の信仰が高まったり、衰えたりするという栄枯盛衰はあったわけで、それを「神々の戦争」と呼ぶのは大袈裟であるけれども、嘘ではないだろう。

そこまでが一応の目標である。しかし、余裕があれば、さらに触れておきたい問題もある。それは、キリスト教を国教化した理由と密接にかかわるが、国教化した結果である。なぜ、キリスト教を国教としたのか、その狙いはなんだったのか、そしてその後の歴史はどうなったのか。キリスト教化した狙いは達成されたのか、そうした問題も考えてみたい。

このようにローマ宗教の流れを極めて大まかではあるが、王政期からキリスト教国教化、さらにはそれ以後にまで射程を広げてまとめてみようとおもった理由は、フランスの比較神話・宗教史学者ジョルジュ・デュメジルのローマ宗教史が他の研究者の業績とつながらない状態で放置されているからである。資料が豊富な帝政期についての研究は盛んである。また少ない資料をもとにした共和政期宗教の研究についても 19 世紀からの蓄積がある。しかし、ローマがローマとなる以前の伝説的な時代である王政期の宗教の状態については、わずかなエトルリア宗教研究者が関心を示すのみで、デュメジルによる比較研究からの再建は無視されている。おおまかな見取り図であっても最初期の研究も含めて描いてみる価値はあると思う。

2. インド=ヨーロッパ語族とイタリック語派

インド=ヨーロッパ比較言語学は、ヨーロッパとアジアの類似する諸言語を比較して、紀元前 3 千年期にユーラシア大陸のある地域に言語を共有していた集団が住んでおり、しだいに分化してヨーロッパとアジアに拡散していったという先史時代の状態を再建した。このインド=ヨーロッパ語族と呼ばれる集団のうち、イタリア半島に侵入してきたのがイタリック語派である。代表的なのは、ラテン人、ウンブリア人、オスク人、サビニ人などである。しかし侵入の年代や経路については必ずしも合意が見られていない。また言語の再建によって文化を共有していた言語集団が存在していたと想定する学問的手法自体に対して批判をする英国の考古学者レンフルーや、同じく英国の人類

学者リーチなどもいる。しかし彼らの批判は、風間によれば、19世紀以来の比較言語学による成果を否定するほどの確固たる根拠は認めがたい（風間 1993; Leach 1999; レンフルー 1993）。

同じイタリック語派に属するラテン人（ローマ人を含む）とウンブリア人の宗教儀礼については、以下に述べるように偶然とは言いがたい一致が見られる。これは相互に影響関係によって成立するような種類の一致とは性格を異にするので、言語の一致と同様に、イタリック語派が共有していた宗教的伝統に由来すると見られる。

19世紀以来のローマ宗教研究では、供儀を行う際の祈祷文の中で「男神でも女神でも *sive deus sive dea*」という句があるのを捉えて、初期のローマ人は神の性別も分からなかった、つまり人格神の観念を知らず、人格がない「力」ヌーメンのみの観念しか所持していない野蛮な発達段階にあったが、やがてより進んだエトルリアやギリシアの宗教や神話を受容したので人格神を崇拝するようになったとする見解が支配的であった（Fowler 1911; Bailey 1932; Wagenvoort 1947; Rose 1948）。

「男神でも女神でも」はローマ人の儀礼における過剰ともいえる慎重さの一環として理解することもできるだろう。ユピテルのための神官であるフラメン・ディアリス *Flamen Dialis* は王政期からいたことが分かっているが、プルタルコス『ローマの疑問』が記録するように、この神官は数多くの禁忌が課せられていた。それらはわざわざ後代に作るような性格の禁忌ではない。そしてフラメンがいた神はユピテルだけでなく、他に十二神もいた。それらの中には資料からは性格が分からなくなってしまう神々もいた。果たしてこうした神々や神官団や宗教的禁忌の数々は人格神の観念が生じてから作られたのか、つまりヌーメンという単なる力をわざわざ十数個に分けて名前をつけて、それぞれに神官も与えたというのだろうか。

ラテン語にはインドのサンスクリットやアイルランドのケルト語と共通する宗教に関わる語彙が認められる（Dumézil 1969; Dumézil 1974; Dumézil 1975; デュメジル 1994; Woodard 2013）。このことからローマ宗教にはインド=ヨーロッパ語族から分枝する以前から宗教的諸概念、人格神の観念、神官団、宗教儀礼などがすでにある程度整った形で存在していたと想定する方がより合理的だろう（後述のイグヴィウムの場合も参照）。そもそも宗教的語彙や祭司神官団や祭事暦や儀礼が整備されていて、しかし肝心の神については単なる力の観念しか知らなかったという状態が有り得るだろうか。

3. 王政期

王政期ローマについては文字資料がほとんどなく、伝承が共和政期と帝政期にまとめられたものが主たる資料となるだけなので、どのような状態であったのかについては不明な点が多い。

イタリック語派とは別にイタリア半島に侵入し、伝承から見るかぎり共和政以前のローマにおいても大きな存在であったと思われるのが、非インド=ヨーロッパ語族系の集団のエトルリア人である。彼らについても侵入の年代、経路については合意が見られていない（Pallottino 1942）。また彼らが言語的・文化的にどの語派に属するのか、あるいは近いのかについても、いまだ解明がなされていない。

エトルリア人タルクィヌスの一族が王としてローマを支配していたが、民衆の蜂起によって王政

が倒れ、共和政が成立したという記述はリウィウスらの年代記に見られる。当初はエトルリア人の力が強大で、徐々にラテン人、ローマ人が権力をもつようになったという図式は間違いないだろうが、エトルリア的なものの王政期ローマ宗教における痕跡については、未解決の部分が多い。内臓占いや鳥占いやなどはエトルリアに由来するとされる (cf. Dumézil 1974: 611-680)。前 8 世紀から南イタリアに植民都市を建設していたギリシア人との交流があり、宗教においても強い影響を受けたらしいことは、エトルリア宗教にギリシアの神々が多いことから明らかである。またエトルリア人は死後の世界に深い関心を持っていたらしく、数多く作られた墳墓からは、ギリシアの工芸品が多数出土している (シュタイングレーバー 2000)。

ギリシア文化の影響はエトルリアを經由して早い段階からローマに到達していたと思われる。カピトリウム丘に祀られたユピテル・ユノ・ミネルヴァの三神群はエトルリアの影響とされるが、さらにギリシアにまで遡ることは間違いない (Dumézil 1974: 291-317)。さらにアポロン、ヘラクレス、アルテミス (ディアナ)、カストルとポリュデウケスなどのギリシアの神々の崇拜も、紀元前 5 世紀から存在したとされている (Bayet 1956: 122-123)。このようにシンクレティズムは規模こそ異なるがすでに王政期にも見られるもので、決して帝政期に固有の現象ではない。

デュメジルは、ローマ固有の宗教的要素を抽出するため、祭司団によって比較的忠実に保存されてきたと思われる祭祀ならびに歴史化された伝承を他のインド=ヨーロッパ語族の神話、宗教、儀礼、社会構造などと比較して、固有宗教の再建を試み、分化以前のプロト・インド=ヨーロッパ語族に由来するものとして三区分的世界観があると指摘した (デュメジル 1987)。

ラテン語と同じイタリアック語派に属するウンブリア語では、青銅板に書かれた宗教儀式の文書 (イグヴィウム青銅板 *Tabulae Iguvinae*) が残されている。これは前 200 年頃に書かれたらしく、つまり前 3 世紀以前の状態を知ることができる貴重なものである (Poultney 1959)。この文書から窺えるのは、デュメジルがローマ資料から推測したのと同様の三区分的な主権神群のグループがイグヴィウムにも存在した事実である。イグヴィウムはローマの北 200 キロ余に位置するアペニン山脈西斜面の町で、町の門の清めに際して門の内と外で六柱の神々への供犠が行われた。門の外側で供犠を捧げられる神々はユピテル、マルス、ウオフィオーヌスで、ローマの主権三神群、ユピテル、マルス、クイリヌスと類似する。また、ウオフィオーヌスの名前は「生産者集団の神」を意味していたらしく、その面でもクイリヌスとの共通性がある (松村 1980a)。

以上の記述から王政期までのローマ宗教の状況をまとめると、

1. 他のインド=ヨーロッパ語族と共通する神話や宗教観念があった。人格神の観念はあったし、宗教の専門家がいて、体系化された儀礼も行われていた。
2. 早くからエトルリアやギリシアの外来の宗教文化が伝わっており、その影響を受けていた。

ローマが王政を始めるようになる状況は、第一の点は日本の場合とは比較できない。ラテン民族はインド=ヨーロッパ語族の分枝であり、イタリア半島に到着する以前から他のインド=ヨーロッパ語族と共通の神観念や宗教的語彙と制度を備えていたと考えられるからである。しかし第二の点については、ローマと日本は似ているように思われる。日本も豪族たちの小国の中から指導者が現れ、韓半島の諸国や中国など外部からの文化を摂取しながら大王つまり天皇が現れてきた。その際に外来の神である仏教や宗教思想としての道教、神仙思想、風水思想を積極的に受容し、宗教体制を整

えていったが、それはもちろん、元々から宗教・神話思考が欠如していたことを意味するものではない。ローマの場合も同様であろう。

4. 共和政期

ローマ宗教には、古いものを廃棄せず、新しい宗教要素と並存させる傾向が見られる。前カピトリウム三神群（ユピテル、マルス、クウィリヌス）はカピトリウム三神群（ユピテル O. M., ユノ、ミネルヴァ）にと取って代わられたが、しかし古い三神の祭司たち大フラーメンはそのまま存続しつづけた（Wissowa 1912: 38-41; Dumézil 1974: 153-317）。

祭は、その意味が不明になりつつも祭事暦（Fasti）には帝政期にいたるまで記録され、おそらく本来の意味は忘れられ、形骸化してはいても開催され続けたのではないかと推測される。たとえば、「十月の馬」やルペルカリア祭などがそうである。祭事暦は帝政期のものが断片的にしか現存しないが、それらを組み合わせて再構成することによって、19世紀以来、共和政期さらには王政期における祭祀のサイクルについても再建が試みられてきた（Fowler 1899; Michels 1967; Dumézil 1969; Dumézil 1974; Dumézil 1975; Scullard 1981; デュメジル 1991; König 1991; Latte 1960; Wissowa 1912）。

その成果によれば、3月と10月にはマルス神と戦争に係わる祭が多く、また複数の祭が対応する形で配置されている。従って、マルスを元来は農耕のヌーメンで後に戦争の神へと性格を変えたと思えず伝統的なローマ宗教史の立場には無理がある。また4月、8月、12月には農耕関連の祭が、そして2月、5月には死者儀礼が多いという傾向もある。またこうした季節ごとの祭の意図的な配置の他に、祭が開催される場所も古い祭ほど、ローマの中心部であり、時代が下がると壁外となる傾向が認められる（松村 1980b）。

しかしこうした祭にインド=ヨーロッパ語族的な要素をどのくらい認めるかについては、デュメジルと他のローマ宗教専門家の間で意見の違いがある。インドとローマの祭、儀礼の間にジェネティックな関係を認め、そうした歴史的関連性の視点からローマの宗教を規定しようとするに抵抗が大きいわけで、インドなり他地域の資料とのタイポロジカルな比較によって、ローマ宗教の不明の部分の推測するという手法をとるならば、両者の立場の歩みよりによる、実りの多い成果が期待できる。

国家の大事や非常時に神々の意思を伺う必要が生じた場合にシビュラの書を紐解いたという記述が以下に見るようにしばしば出てくる。シビュラは南イタリアのクマエの女予言者とされる（ウェルギリウス『牧歌』4「黄金時代がやってくる」）。シビュラとシビュラの書については、歴史的資料はなく、2世紀ローマの作家アウルス・ゲリウス（Aulus Gellius, c. 125-after 180）の著作『アッティカの夜』（1.19.1-2）にエトルリア系のローマ王タルクィヌス・スペルブスの元に異国の老婆が訪れ、予言書を買うように求め、王はそれを買って、カピトリウム丘のユピテル神の聖所に収めたとある。しかし実際にこの書の扱いを仕事とする十五人神官団がいたことは確認されており、単なる伝説ではない（Parke 1988: 136-151）。

リウィウスによれば（4.25）、前433年に疫病が流行った時、シビュラの書が紐解かれ、快癒のためにアポロン神殿建立の誓願が行われたとされる。アポロン（ローマではアポロ）はエトルリア

人にも崇拜されていたので、ローマでも早くから崇拜された。

領土拡大

ローマの勢力が次第に伸張すると、周辺部族との対立が起こる。前 396 年、エトルリアの都市ウエイイがカミルスによって征服されたという伝説は、神話的パラダイムによって意味づけられている可能性が高い (Dumézil 1973: 39-85)。歴史を神話的パラダイムにそって解釈し、記述する傾向はローマのみならず、インドや北欧においても認められる (デュメジル 1987)。

その後もローマの伸張は続き、カンパニア地方のサムニテ人を破った後、南イタリアに矛先を向け、マグナ・グラエキアのギリシア人都市の中でもっとも豊かなタレントリムを相手に勝利を収める。こうして地中海に進出したローマは次いで、地中海での交易と航海権を賭けて、フェニキア人の海洋国家カルタゴとの不可避の衝突に突入することになる。

カルタゴとの第二次ポエニ戦争時で劣勢に陥っていた前 204 年、ローマでは事態の打開のためにシビュラの書が調べられ、アナトリア (小アジア半島) のプリュギアのペッシヌスの山の女神キュベレを招来すべしとの記述があり、それがデルポイのアポロンの予言でも確認されたので、女神が招来されたという。その御神体は黒い石であった (これはやがてローマに招来されるシリア、エメサのエラガバルとよく似ている (後述)) (リウィウス 29・10・4—11・8, 14・5—14; オウィディウス『祭暦』4月4日の項, Bremmer 1979; Borgeaud 1996; Roller 1999; フェルマースレン 1986)。

こうしてイタリア半島やギリシアの神々とは異なる荒々しいオリエント風の大女神がローマの中核に祭られることになった。異国風の女神によるショック効果があったためかどうか、第二次ポエニ戦争は前 201 年にローマの勝利によって終結し、ローマは地中海世界の覇者となった。カルタゴはローマの領土となり、その結果フェニキア人の神タニトへの信仰もローマに入った。

リウィウスによれば (10.47), 前 293 年にローマで疫病が広がった時、シビュラの書が紐解かれ、そこに医療の神アスクレピオス (ローマ名アエスクラピウス) をエピダウロスから招来すべしと書かれていたので、翌年にこの神を招来してティベレ川の中州の島に安置したという。

アレクサンドロスの死後、その将軍たちが領土を分割して、アンティゴノス朝マケドニア、セレウコス朝シリア、プトレマイオス朝エジプトの三つのヘレニズム王国が生じた。

アンティゴノス朝マケドニアは前 3 世紀にカルタゴと手を結んでローマと戦った。このためローマはカルタゴと同時にマケドニアとも戦うことになった (マケドニア戦争)。カルタゴに勝利したローマはマケドニアにも勝利し、カルタゴの領土の北アフリカとスペインに加えてギリシア語世界であるマケドニアも領土とした (前 168 年)。セレウコス朝シリアは前 2 世紀、エーゲ海の島々をめぐるローマと戦ったが、敗れ、ギリシアはローマに属することになった。プトレマイオス朝エジプトは前 30 年まで独立を保ったが、最終的にはローマの属領となった。

こうした戦争と領土の占領によって、ローマはかつてのヘレニズム王国の広大な領土を支配するようになり、ギリシア語文化圏の宗教要素からの影響を受けることになる。エレウシスの密儀、オルフィック教、治癒神アスクレピオスなどである。

戦争の終結による精神的な開放感は、キュベレとアッティスの密儀ばかりでなく他のオリエント風の密儀宗教の流行も招いた。ディオニュソスはローマではバッカスの名で知られていたが、ブドウ酒と狂乱を伴う密儀の神であったため、夜間に少数の男女が神殿ではなく私宅に集って行う密儀

が風紀の乱れとして警戒され、前 186 年にはバッカナーリア事件として多くの人々が逮捕され、密儀宗教への熱狂は一時的に衰退した（リウィウス 39・3—18）。しかしその信仰が帝政期まで続いたことはポンペイの秘儀荘からも窺える。

5. ヘレニズム期から帝政ローマ

共和政前期まではローマ宗教とはイタリア半島の宗教のことだった。しかし上記のような領土の拡大にともない、異なる文化背景をもつ多くの民族を抱えることになる。つまり複数の「ローマ宗教」の共存を述べる必要があるし、そして帝国の文化的・精神的統一のための宗教シンボルについても述べる必要がある。

1 アウグストゥス

共和政末期の第一回三頭政治は内乱状態を生み出した。カエサルの暗殺以後、カエサルの養子となっていたオクタヴィアヌスが第二回三頭政治によって安定をもたらした。その後は宿敵であったアントニウスとの戦いに勝利して、名前をアウグストゥスと変えて、初代の皇帝となった。

また彼は内乱によって放置されて荒廃していた神殿を修復し、また新たな神殿を建立することを認めて、宗教復興を図った（「神君アウグストゥスの業績録」）。もちろんそれは復興のみではなく、新たな帝政の時代に相応しく宗教の在り方を刷新することでもあった。特にアウグストゥスは自身が崇拝していたアポロやフォルトゥーナやウェヌスの崇拝を盛んにするように努めた（小堀 1997）。

権力の集中は共和政末期にすでに見られた。元老院議員が交代で執政官や独裁官となるシステムでは独裁的権力は発生しにくかったが、ポンペイウス、カッシウス、カエサルによる三頭政治も有力政治家が相互に独走を抑えるための妥協であり、カッシウスが亡くなり、カエサルがポンペイウスとの戦いに勝利したことで単独の支配者による独裁制への道が拓けた。そしてカエサルが暗殺されると甥で養子であったオクタヴィアヌスがカエサルに代わって独裁者つまり皇帝となる。

共和政期には祭司職は元老院議員が兼職していた。その面で政治と宗教は結びついていたが、政治において権力の集中が避けられていたのと同様に祭司職においても特定の個人が兼職することは避けられていた。それがカエサルの時から変わり、アウグストゥスになると政治職も祭司職もすべて彼が独占することになった。アウグストゥスの宗教改革とはそうした彼の政治・宗教の両面における独裁的権力の産物である。

共和政から帝政への変化は、国家の巨大化に伴い、独裁的権力によって広大な地域を支配する必要が生じたためとして説明できる（現代社会でも大国ほど独裁的権力者に委ねられている）。こうしてみると、共和政の宗教と帝政期の宗教は二つの理由から性質が異なるものとなったと説明できるだろう。

第一に、伝統的宗教は帝政期になっても形態上は大きな変化が見られなかったが、実際の運用では聖俗両面の最高権力者となった皇帝の意向に沿ったものにならざるを得なかった。アウグストゥスの行った世紀祭や次に述べるエルガバルスによるシリアの太陽神崇拝の導入などはその典型であろう。

第二に、領土の拡大による多民族国家化によって異なる文化背景を持つ複数の民族が帝国内に共

存する状態が生じた。当然それぞれの民族宗教が共存するし、また新しいタイプの宗教も生まれた (Beard, North, Price 1998a: 114-210)。

2 エラガバルス (ヘリオガバルス)

エラガバルス Elagabalus (203 頃～222, 在位 218～222) はシリア生まれで若くして皇帝となったが、狂気じみた振る舞いによって数年のうちに暗殺された。シリアの都市エメサではエラガバルスという名前の黒い隕石が崇拝されていた。そしてこの石は「不敗の太陽 Sol Invictus」と見なされていた。この神を祭る神殿の神官がこの地のローマ総督であったルグドゥネンシスの娘の一人と結婚した。ルグドゥネンシスは 193 年にローマ皇帝セプティムス・セヴェルスとなった。セプティムス・セヴェルスの親族の女性が子を生子、その子はエラガバルス神の神官となった。やがて彼の母は息子の父親がカラカラ帝であると主張した。事実かどうかは不明だが、この子は軍隊の支援を受けて皇帝となった。彼は正式な名前のマルクス・アウレリウス・アントニヌスよりもその神の名で呼ばれた。こうしてローマの伝統的宗教とは異質なシリアの太陽神がローマの権力の中枢に入るようになった (Turcan 1996: 176-187)。

3 ギリシア密儀宗教

ローマが拡大して東方のヘレニズム諸国を領土に組み込むようになると広大な領土はラテン語地域とギリシア語地域とが併存することになる。ギリシアの治癒神アスクレピオスはヘレニズム時代にギリシア語圏で盛んに崇拝されていたが、必然的にローマでも崇拝されるようになった。治癒神という性格はイエスと似通い、キリスト教護教家を悩ませることになった (山形 1976; 史料集として Edelstein & Edelstein 1945)。ディオニュソス (バッカス) についても前 186 年の個所ですでに述べたが、ポンペイの秘儀荘に見られるように、弾圧の後にも密儀宗教の神として広く崇拝されたらしい (ジャンメール 1991: 630-668; Turcan 1996: 291-327; Turcan 2003)。

4 アナトリア宗教

キュベレのポエニ戦争時のローマへの招来についてはすでに述べた。

キュベレは小アジアのプリュギアでアグディステスという名前でも崇拝されていた。騒々しい音楽を奏でて陶酔的な礼拝を行う男性神官がいて、彼らはガロイと呼ばれ、陶酔のうちに自己去勢を行うことがあった (Wissowa 1912: 317-327; Bremmer 1979; Borgeaud 1996; Turcan 1996: 28-74; Roller 1999)。この神官の姿はキュベレの年若き愛人の牧羊者の姿をした男神アッティスに反映しているのかも知れない。アッティスについてはフレイザーが『金枝篇』においてアドニス、ディオニュソス、ペルセポネ、バルドルなどとともに「死んで甦る神」の一つに数えているが、この説は成り立たない (松村 2001)。ただし、神官と信者による狂乱の祭儀はディオニュソス (バッカス) の場合と似通う。比較すべきは神話ではなく、儀礼であろう。

5 シリア宗教

プルタルコス『英雄列伝』『クラッスス篇』17 にはクラッススが訪れたシリアのヒエラポリスの女神の神殿のことが記されている。この女神はローマではデア・シリア「シリアの女神」と呼ばれ、

アナトリアのアタルガティス、ギリシアのアフロディテなどと同一視され、その祭儀はキュベレのものと似ているとされていた (Turcan 1996: 133-143)。ここでは異なる地域の有力な女神たちがローマ宗教の枠組みの中で同一視されて習合していくプロセスが見て取れる。これは女神に限らず、男神についても当てはまる。

6 エジプト宗教

カエサルやアントニウスやアウグストゥスによってクレオパトラ時代のエジプトはローマ帝国の領土となった。イシスは航海の守護神として船乗りたちの信仰を集めた(中国の媽祖のようである)。エジプトはスペインと並んで帝国の穀物供給地であったから帝国各地の港にはどこでもエジプト人船員とイシスの神殿が見られた。エジプトでのイシスはプルタルコス『イシスとオシリスについて』が記すように夫オシリス、息子ホルスとの聖家族の構図で崇拜されていたが、ローマ帝国の神としては単独でも航海の守護神そして女性も参加可能な密儀の神としても崇拜を集めた。アブレイウスの『黄金のロバ』はイシス崇拜の書でもある。巻 11 でイシスは主人公に対して、自分はブリュギアの神々の母(キュベレ)、ミネルヴァ(アテナ)、ウェヌス、ディアナ、プロセルピナ、ユノ、ペローナ、ヘカターなどさまざまな姿で現れると述べている。上述と同じシンクレティズム神学である (Witt 1971; Turcan 1996: 80-129; Frankfurter 1998)。

またイシスはエジプト神話・宗教においてオシリスと夫婦とされていたため、オシリスがギリシア人王朝であるプトレマイオス朝においてオシリスやゼウスと同一とされたセラピス(サラピス)とローマでは夫婦神としても崇拜された (Turcan 1996: 76-80)。

7 太陽神

アウグスティヌスはアポロを自らの守護神とし、パラティヌスの丘にあった自宅の隣にこの神の神殿を建てた。アポロは太陽神とされていた。その後、エルガバルスが皇帝の時に、シリアのエメサから黒い隕石がご神体の太陽神が招来され、ローマではソル・インウィクトゥス・エルガバル「不敗の太陽エルガバル」と呼ばれた。太陽神は天体のコスモロジーを持つミトラ教でも崇拜されていたので(後述)、女神の場合と同様に男神では太陽神という傘の下に神々の同一化、習合、そしてひいては一神教化が進んだ。(Ferguson 1970: 44-47; Turcan 1996: 179-184; 小堀 2003; 中西 2003; 井上 2010)。

8 皇帝崇拜

帝国の生き残りのためには中心となるシンボルが必要である。アレクサンドロス以降のヘレニズム諸王国では、アレクサンドロスの将軍たちが王として支配したが、彼らはアレクサンドロスの自己神格化を真似て、生前の支配者に対する崇拜を行わせた。ローマでも国外の君主崇拜は知られていたもので、カエサルの頃からその傾向はあったが、アウグスティヌスが皇帝となって以降、その傾向はさらに強まり、ヘレニズム王国が領土になると皇帝崇拜は一神教的になっていった。そして太陽神崇拜と皇帝崇拜が重なり合う傾向が生まれた (Charlesworth 1935; Ferguson 1970: 88-99; Price 1984)。

6. いわゆる「オリент諸宗教」

その後もローマ帝国は領土の拡大を続け、五賢帝の一人のトラヤヌス帝の時代（在位 98～117）には最大領土となる。ローマとイタリアは名目上の中心であり続けたが、実際の経済においてはスペインや北アフリカの比重が大きくなった。そして帝国内の住民に市民権を与え、ローマ式の生活と教育を提供したので、イタリア以外からも皇帝が誕生するようになった。また帝国の広大な領土の治安のために必然的に軍人の力が強くなり、皇帝の推挙に際して次第に軍人の意向が強まることになった。3世紀までに限っても、イタリア以外生まれの皇帝として以下の五人がいる。

1. トラヤヌス（53～117, 在位 98～117）—スペイン生まれ。
2. ハドリアヌス（76～138, 在位 117～138）—スペイン生まれ。
3. セプティミウス・セウェルス（146～211, 在位 193～211）—北アフリカ（現リビア）生まれ。
4. カラカラ（188～217, 在位 198～217）—フランス（ガリア）生まれだが、母親ユリア・ドムナは北アフリカの出身。
5. エラガバルス（ヘリオガバルス）—シリア生まれ（前述）。

このようにローマ皇帝の出身地は帝国の広大さに比例して多様化しており、ローマ法王の出身地の多様化をはるか以前に先取りしている。これは皇帝だけでなく帝国内での人々と物流が高い移動性を持っていたことを示しているだろう。そして各地の伝統的土着宗教も帝国内を人や物に付随して移動し、いわゆる「ローマ帝国のオリент諸宗教」が混在・共存する状況を生み出した（Cumont 1911; Vermaseren ed. 1981）。

しかしこの「ローマ帝国のオリент諸宗教」という言い方はもちろんオリエンタリズムの産物である。イタリア本土が「西洋・オクシデント」であり、後から加わった地域はより劣ったという意味で「東方・オリент」と命名されているに過ぎないからだ。

1 ミトラス教

ミトラス教の起源についてキュモンはイランを想定したが、その後、キリキア海賊の信仰がペルシア風を装ったという説の方が有力となっている（Cumont 1903; フェルマースレン 1973; キュモン 1993; Gordon 1996; Turcan 1996: 195-247）。信者は男性に限られ、階梯があったので、軍人に人気があった。しかしそのことは逆に信者の拡大を限定することにもなり、キリスト教の伸長とともに衰えた（小川 1993; 小川 2003b）。天体信仰との関連も考えられる（Beck 1988; Ulansey 1989）。ミトラス教の教義ではミトラスと太陽神ソルとは別個だが、ミトラスを太陽神とみなす傾向も生じた。

2 ダイモン信仰

ダイモンという概念は、①神々と人間との中間の曖昧な領域の超自然的存在、②善と悪の側面が交代で出現する場合、あるいは同時に両面を示す場合など両義的、③個性が弱くて集会的、といった特徴をもつ。こうした特長は多神教と融和的・協調的である。しかし一神教でも消滅せず、変容して存在しつづける。神ほどの力はないが個人の守護霊という位置づけであったものが、唯一神し

か認めないキリスト教の社会では悪霊化してデーモンとなっていった。(Matsumura 2003; 松村 2004)。

3 ユダヤ教

ローマが地中海世界に勢力を伸ばした頃、ユダヤではハスモン家がセレウコス朝シリアからの独立戦争に勝利して王朝を樹立した(前 140 年)。しかし前 64 年にローマはセレウコス朝を滅ぼし、ユダヤにも勢力を伸ばし、前 63 年にはエルサレムを占領してパレスチナを支配した。そして前 40 年には傀儡政権としてヘロデをユダヤ王に任命する。66 年には対ローマ戦争が始まり、70 年にはローマ軍のために第二神殿が破壊される。ローマに対するユダヤ人の抵抗はその後も続くが、132 年から 135 年の対ローマ戦争の後にはエルサレムへのユダヤ人の出入りが禁止された(市川 2009)。

こうしてユダヤはローマの属領パレスチナとなるが、それ以前からユダヤ人はエジプトのアレクサンドリアが典型的だが地中海世界に広く居住していた。ローマ軍と戦って捕虜となった後はローマ総督の側近となってユダヤ人の歴史を残したフラウィウス・ヨセフスは著作『ユダヤ古代誌』(14.115) や『ユダヤ戦記』(2.398) で、およそ人の住むところでユダヤ人が勢力を有していない土地はないと述べている。

ユダヤ教は民族宗教として安息日や食物禁忌など独特の教義を持ち、基本的には閉鎖的な宗教である。ヨセフスによれば(『ユダヤ古代誌』14.213-215)、ユリウス・カエサルはユダヤ人が神殿に献金することや集まって会食することを認めると宣言したという。もちろん、こうしたユダヤ人・ユダヤ教を緩やかに許容する状況は対ローマ戦争後になると変化し、重いユダヤ税(ユダヤ銀行とも)が課せられた。

皇帝崇拝については皇帝カリグラ(在位 37-41)の時代のことがヨセフス『ユダヤ戦記』(2.184-203)に記されている。エルサレム神殿に皇帝の像が持ち込まれそうになったが、かろうじて避けられたとなっている。

4 ストア哲学

1, 2 世紀ローマではエピクテトス(『語録』)、キケロ(『義務について』)、セネカ(『神慮について』)、皇帝マルクス・アウレリウス(『自省録』)らによるストア哲学が盛んだった。この哲学は神を否定しない。万物の始原は一なる神であり、自然、宇宙、火、理性、運命、ゼウス、ロゴスなど同一であるとされる。この理性なる神は複数の種子をもつので、単数形でも複数形でも言われる。神は全世界に満ちており、人間の中にも神が存在するから神性を有する。神は理性であるから人間を導き、正しい生活を送らせる。こうした哲学は一神教に近いが、多神教とも対立しない。宗教だけでなく(あるいは宗教と連動して?) 神は一だが複数の異なる姿でも現れるという立場が認められる。多から一への流れ(あるいは多にして同時に一という立場)は宗教だけでなく哲学においても見られたといえるだろう(Cumont 1922; Nock 1933: 171-231; Dodds 1965: 9-10; ドッズ 1981: 24-28; キュモン 1996)。

5 背教者ユリアヌス(331~63. 在位 361~63)

ユリアヌスはコンスタンティヌス一世の親族で皇帝となったが、熱心な新プラトン主義者であり、

帝国がキリスト教化しつつあった時代にキリスト教に反対したので「背教者」と呼ばれた。キューベレや太陽の信仰の復活をもくろんだが、若くして戦死したため実現しなかった (Bidez 1930; Bowersock 1978; パワーソック 1986; 中西 2016)。

7. キリスト教の公認と国教化

よく知られているように、キリスト教は当初、ローマ帝国において迫害された。原因は皇帝崇拝をキリスト教徒が拒絶したことである。皇帝崇拝を拒絶することは、帝国に対して忠誠を示さないことだから、反逆者となる。ユダヤ教もちろんヤハウェ以外の存在を礼拝することは拒んだが、伝統的な民族宗教であり、他の人々に教えを広める意志がないこともあって、見逃されていた。しかし、キリスト教は違う。キリスト教は伝道し、人々に入信を勧める。したがって迫害は不可避であった。また福音書や使徒行伝が殉教を褒め称えていたので、多くの信者はキリストや使徒たちの殉教に倣うことをむしろ誇りとしたらしい。迫害は皇帝ネロやディオクレティアヌスの場合が有名である (半田 1970; 保坂 2003; 松本 2017)。

スエトニウス『ローマ皇帝伝』の第六巻「ネロ」16は簡潔に「前代未聞の有害な迷信に囚われた人種であるクリストゥス信奉者に処罰が課された」と述べるだけだが、タキトゥス『年代記』(15.44)はネロ帝 (在位 54-68) の時代にキリスト教徒が残虐に処刑されたと具体的な処刑の仕方まで記している。また政治家小プリニウスは、トラヤヌス帝の時代の111年に属州の総督として小アジア半島北部のピチュニアに赴任していたが、同地でのキリスト教徒の取り扱いについてトラヤヌス帝に手紙を送っており、皇帝からの返書も残っている (『書簡集』 10.46, 10.47)。

こうした迫害状況に変化が起こる。311年、ガレリウス帝による寛容令が出されたのである。しかし、同年、ガレリウスは死去する。すると313年、コンスタンティヌス帝によってキリスト教公認 (ミラノ勅令) が発せられた。そして392年にはテオドシウス帝による異教禁止の勅令が出された。それはキリスト教のみが認められることであり、こうしてキリスト教の国教化が定まった。

キリスト教受容においては女性の役割が大きかったという説がある。男女差別を少なくしたことが勝因というのである (Kramer 1992: 174-190; Kuefler 2001; Stark 1996: 95-128; スターク 2014: 126-165)。男性のみのミトラス教に比べ、キリスト教の教義が女性に寛容であったことは事実だろう。しかし、そうした教義の卓越さゆえに信仰者が増えて、国教と認定せざるを得なくなったというのは、あまりに一面的で、神学的・護教的である。確かに女性や貧者や異邦人に対しても他宗教より寛容であったので不安定な時代に多くの信者を獲得したことは事実かも知れないが、なぜ国教となったのかといえ、それは皇帝コンスタンティヌスが公認し、皇帝が国教化したからであろう。皇帝にとって公認し、国教化することが帝国の安定に重要と思われたことこそ、第一の要因だったのである。

コンスタンティヌス大帝のキリスト教信仰と太陽神信仰についてはまだ議論がある。意図的に両者を混同した (どちらにも良い顔をした) 可能性もある。例えば4世紀のコンスタンティヌス大帝の息子のコンスタンティヌス二世の時代に成立した暦では、ある暦では12月25日が不敗の (太陽) 神の誕生日とされ、別の暦ではユダヤのベツレヘムでキリストが誕生したとなっている (保坂 2005a: 21)。ただし通常ならばはっきりと「不敗の太陽神 Sol Invictus」とあるべきなのに、上記の

暦では単に「不敗の神」とソルの語が欠けている。キリスト教寛容令を発した後もコンスタンティヌスは太陽神と自分を同一化するようなモニュメント作りを止めていない（保坂 2005a: 80）。

結局、コンスタンティヌス大帝にとってもローマ帝国内の司教たちにとっても両者の違いを過度に鮮明にしないことが最善の策だったのであろう。キリスト教は寛容令から公認へと進んで安定した国教の身分を手に入れたのだから、あえて太陽神崇拝や皇帝崇拝と事を構える必要はなかったのだらう。

一神教は帝国の維持に都合がよいのだらう。コンスタンティヌス以前にもすでにローマ帝国は安定性を欠いていた。皇帝の頻繁な交代、あるいは複数の皇帝による分割など、国家の安定には望ましくない。一人の皇帝による政治的統一は一人の神による精神の統一とパラレルである。つまり、それを独立、敵対する力としてでなく、自己の権力の側に取り込み、バックボーンとすることの方がむしろ望ましい。軍人を信者の中核とするミトラス教ももちろん悪くないが、しかし、上記のように女性を取り込めることも必要だし、特定の集団だけでなく、上流社会から庶民、さらには奴隷階級まで取り込むことのできるキリスト教の教義は国家の宗教を選ぶ際に有利に働いた。また帝国が東西に分裂し、生き残ったのが東ローマであることから分かるように、帝国の経済的基盤はエジプトやオリエントにあった。そうした地域の方が人口も多く、経済的にも重要であった。そこに基盤を置く一神教とその信者こそが、国家を支える重要な要素と見なされたのであろう。

帝国期のローマ宗教はすでに全体として一神教的になりつつあった。上述のように、神々の同一視によって男神は太陽神化し、皇帝と同一視されていった。女神もまた大地母神的に同一視が進んだ。つまり表面的な神名や職能の違いの背後に同じ本質を見ることが一般的になってきており、上記の太陽神崇拝／皇帝崇拝とキリスト教の併存から見るように、異教からキリスト教への移行はそれほどドラスティックではなかったのであろうし、それほど厳密でもなかったのかも知れない（Athanassiadi & Frede edd. 1999: 81-148; Fauth 1995）。

8. 古代世界と一神教の帯

広大な領土に多民族を抱えるようになると統治のために共通の象徴が必要となる。その一つが皇帝崇拝、もう一つが一神教化であろう。しかし両者は別個のものではない。皇帝崇拝も一神教化の一つの現れなのだ（Fowden 1993; Athanassiadi and Frede edd. 1999）。

ローマ帝国における一神教化は、より大きな一神教成立の条件という問題も考えさせる。その際、一神教がある特定の地域に発生していることが注目される。歴史的に見て早い時期と思われるものから、一神教を列挙していくと、エジプト、イスラエル、イラン、インド、ヘレニズム世界、ローマ、アラビア半島となるだらう。

エジプトのアケナテン（アメンホテプ四世、イクナトン）は、アモン・ラー神崇拝の中心地であったテーベから都をテル・エル・アマルナに移し、太陽神アモンの信仰のみを推進するという宗教改革、いわゆる「アマルナ革命」を行った（前 14 世紀なかば）。

イスラエル民族のヤハウエー神教は、旧約聖書のモーセに率いられた出エジプトの記述に歴史的事実があるとすれば、エジプトの一神教との関連が推測される。ただしヤハウエー神教成立の正確な年代は判断が難しい。バビロン捕囚以後の前 6 世紀に一神教が確立していたことは明らかだが、

それがさらにどれほど時代的に遡れるかについては意見の一致が見られない。イクナトンのアテン信仰の影響を認めるかについても一致はない。「アテン讃歌」は旧約の詩篇と類似しており、これは偶然ではなく、ヘブライの詩人がエジプトの作品に親しんでいたためと考えることも不可能ではない（ワイズマン 1995: 150）。

その後の一神教的宗教としては、ゾロアスター教、仏教、ジャイナ教、マニ教、キリスト教、グノーシス、そしてイスラームが挙げられよう。地域的にはエジプトからインドまでの範囲に収まる。そして風土的には乾燥地帯が多い。人々や思想の移動が多いし、移動しやすい地域であることもこうした一神教的宗教が盛んに現れる傾向と無縁ではないだろう。

またその中に一神教的宗教と帝国の成立が関連していると思われる場合も見受けられる。イスラエルの一神教はエジプトとメソポタミアの両地域の帝国化の狭間で生まれている。ゾロアスター教、仏教、ジャイナ教は、アケメネス朝ペルシア帝国の成立と無関係とは思えない。マニ教、キリスト教、グノーシスはローマ帝国時代の産物である。そしてイスラームはビザンツ帝国とササン朝ペルシアの抗争の最中に交易によって財力と武力を蓄えたアラビアから生まれた宗教である。

もちろん、帝国ができるで一神教ができるという単純な図式ではない。広大な地域に複数の民族を抱える帝国が成立すると、そこに異なる文化の併存と交流が生まれ、安定をもたらす宗教形態として異なる神々を同一視して唯一神化していく傾向が生じるのではないかということである。

より一般化した言い方をすれば、統一国家成立と一神教化はセットとなりやすいとも言える。日本において仏教の導入はなぜ熱心に行われたのだろうか。それは唯一の神に対する信仰が地上レベルでの唯一の支配者の観念と対応すると思われたからではないか。日本だけではない、韓半島や東南アジア諸国においても仏教が国家の宗教として受容されたのも同じ理由だろうし、さらに仏教の後にアジアにおいてイスラームが進出したのも同じ理由に基づくのだろう。世界に一神教が広まる過程とはおそらく統一国家の成立の歴史と連動している。

付論：研究史

ローマ宗教の研究史を概観しておく。共和政期までと帝政期と分けて述べる。

I 史料集：Grant 1957; Beard, North, Price 1998b。また、帝政期の「オリエン特諸宗教」については、フェルマースレンが始めた *Études préliminaires aux religions orientales dans l'Empire romain* (EPRO) のシリーズが E. J. Brill より 1961 年から継続して刊行されている。帝政期とキリスト教については Lee 2000; 保坂 2005b; クラウク 2017。

II 主として共和政期までについての研究：19 世紀からの伝統的なローマ宗教観はギリシアより未開な農民の宗教というものであった。こうした見方はもちろん、進化主義的な視点からのものでフレイザーの『金枝篇』が典型的である (Frazer 1890)。イギリスのファウラー (Fowler 1911) やベイリー (Bailey 1932) やローズ (Rose 1948)、オランダのワーゲンフルト (Wagenvoort 1947) はこの流れに属する。こうした見方は後にデュメジルによって批判された (Dumézil 1974)。他方、暦や碑文を基にした制度の研究は現在まで続く着実な成果を挙げた (Fowler 1899; Wissowa 1912; Michels 1967; Dumézil 1975; 松村 1980b; Scullard 1981; デュメジル 1994; Rüpke 1995)。共和政期から帝政期に変わる時代に宗教にどのような変化があったかについても議論がある (Beard,

North 1990; Scheid 1995; Scheid 1998; Beard, North, Price 1998a)。また近年、制度や儀礼を主とした研究ではなく、人々の日常的宗教感情としての「生きた宗教 lived religion」に力点を置いた研究がドイツのリュプケによって提唱されている (Rüpke 2014; Rüpke 2018)。

次に現在に至るまでの概説的研究を国ごとに挙げておく。フランスでは Grenier 1925; Bayet 1956。ドイツでは Altheim I-II 1956; Latte 1960 (帝政期も含む) ; Rüpke 2014; Rüpke 2018 (帝政期も含む) ; Rüpke ed. 2011; Wissowa 1912。イギリスでは Liebeschuetz 1979; Beard, North, Price 1998a; Beard, North, Price 1998b (帝政期も含む) ; Feeney 1998; Schultz & Harvey edd. 2006; Warrior 2006 (帝政期も含む), アメリカでは Ando ed. 2003 などがある。日本では共和政期までについての概説書はまだないようである。

III 主として帝政期についての研究：古くはローマ宗教研究といえせいぜいアウグストゥスあたりまでのイタリア本土の宗教を対象にしたものだった。もちろんエトルリア宗教やギリシア宗教からの影響は無視されてはいなかったが、かといって重視もされていなかった。そしてその次はキリスト教化が問題とされた。アウグスティヌスが『神の国』で揶揄したのはヴァロやオウィディウスの描く共和政期のローマ宗教だったから、研究者もそれほど問題にしなかったのかも知れない。しかしそれではイタリア本土以外の地の諸宗教が無視されている。その点を問題にしたのはキュモンだった。こうした外来諸宗教をローマ宗教に組み入れた結果、いわゆる伝統的ローマ宗教としての「異教」がより優れたキリスト教によって置き換えられていくという護教的な議論は難しくなった。キリスト教の国教化の問題も他の外来宗教との関係性の中で議論されるようになった。

キュモン以降、伝統的ローマ宗教だけでなく、帝国に組み込まれた他地域の宗教も考察した帝政期ローマ宗教史はオランダのフェルマースレンを中心に推進され、多くの資料と研究が出版されている (I 史料集を見よ)。その中でもミトラス教研究は革命前のイランでのシャーの後援もあってとくに活発であった。

概説書としてはオランダでは Vermaseren ed. 1981, フランスでは Turcan 1996; Turcan 2000, ドイツでは Latte 1960, イギリスでは Beard, North, Price 1998a; 1998b; Ferguson 1970; Grant 1970; Rüpke ed. 2011, アメリカでは Ando 2008; MacMullen 1981, 日本では本村 2005; 小川 2003。

個別の問題については本文を参照のこと。

IV 多神教とキリスト教の対立とローマ帝国のキリスト教化についての研究：Benko 1984; Brown 1981; Brown 1982; Brown 1987; ブラウン 2002; ブラウン 2006; Digeser 2000; Dodds 1965; ドッズ 1981; Fox 1986; Geffcken 1978; Glover 1909; Hopkins 1999; ホプキンズ 2003; 保坂 2003; MacMullen 1984; MacMullen 1988; 松本 2017; 中西 2016; Nock 1933; Rüpke 2018; Stark 1996; スターク 2014 など。

註

- (1) 2019年の日本宗教学会第78回学術大会(於、帝京科学大学)ではドイツのエアフルト大学でローマ宗教史を講じられているヨルグ・リュプケ(Jörg Rüpke)教授にご参加いただき、Lived

Ancient Religion: Circum-Mediterranean World というパネルを行った。以下に記すように私は学部や大学院でローマ宗教を多少勉強はしていたが、それは正統的なスタイルではなく、ローマ最初期の王政期の資料に基づいてインド=ヨーロッパ語族に由来する宗教要素を探るという変則的なものだったので、とてもローマ宗教を専門に研究したとはいえず、それにその後は他のインド=ヨーロッパ語族の神話と儀礼やさらには日本神話の研究にまで手を広げてしまったので、ローマ宗教とはあまり縁がなかった。しかしパネルの司会を引き受けたので、それなりにリュプケ教授の研究をはじめとする最近のローマ宗教研究の動向を勉強した。また以下にも記すように、自分なりにローマ宗教のまとめをしようと試みたこともあったので、今回、未完であった論考を増補する形で、このような全体像を描く試みを提示することになった。非専門家による遅まきかつ未熟なレポートの感は免れないが、ここではリュプケ教授、それから以下に記す理由で吉田敦彦先生と故小川英雄先生への感謝の気持ちを記させていただく。

吉田敦彦先生のお名前をはじめて知ったのは、1974年、一橋大学社会学部の三年生の冬のことだった。当時私は、ビザンツ社会経済史の権威であった渡辺金一先生のゼミでキケロの「スキピオの夢」やアウグスティヌスの『神の国』をもう一人のゼミテンと読んでいたが、卒業論文を書く相談を渡辺先生とした際に神話や宗教に関心があると話すと、先生はギリシアならニールセンの『ギリシア宗教史』が基本である、ローマについては最近、フランスのデュメジルという人の『古ローマ宗教』という本の英訳本が大学の図書館に入った、どちらをやりたいのか、と尋ねられた。ギリシアの方に興味があったが、ドイツ語は得意ではないので、冬休みにデュメジルの英訳本を読むことになった。

そのデュメジルの『古ローマ宗教』の序文の末尾において、デュメジルは次のように書いていた。「日本の若い研究者の吉田敦彦氏は、索引の作成を助けてくれ、またその際に、多くの有益な意見を述べてくれた。そのことに感謝する」(Dumézil 1974: 11)。私は、デュメジルにローマ宗教の問題について耳を傾けさせるような意見を述べる日本人がいることに驚嘆した。しかしその人物は、探すと意外にも吉祥寺の成蹊大学に奉職しておられた。卒論を書くに際して、面識のなかったにもかかわらず私が相談に伺うと、大学者らしくらぬ打ち解けた物言いで、温かく相談にのってくださり、デュメジルの上記著作でのローマ宗教の見解を参考にして、マルス、クイリヌス両神の位置づけをするように勧めてくださった。そしてそのことが、私の研究者としての第一歩となった。吉田先生が古稀を迎えられるにあたり、長年にわたる学恩に感謝し、卒論から半世紀近く経った今、再びローマ宗教について考えてみたのである。

デュメジルも吉田先生も、普通は「比較神話学者」という肩書きがつけられる。しかしもちろん、二人の業績は「神話」だけに留まるものではない。プレイヤーにしる、デュメジルにしる、レヴィ=ストロースにしる、神話は人類文化の謎に挑むのに手がかりとなりやすい領域だから研究の対象としたのであり、文化の他の諸側面、言語、儀礼、宗教、法律、社会構造、哲学、文学、芸術などへの関心を排除するものではない。だからこそ、デュメジルは文法、叙事詩、祭の体系などの研究によって、言語学や文学や宗教学の専門家としても認められているし、吉田先生もまた西洋古典学、フランス語、上古国文学などの多岐にわたる分野の専門家なのである。二人がインド=ヨーロッパ語族について積み重ねられた研究は、比較神話学以外に、文明史とか宗教史と呼んでも構わない。名称ではなく、実質が大事なのだ。

本稿は吉田敦彦先生の古希記念論文集（吉田 2005）のために書き始められた。しかし完成できず放置されたままになっていた（論文集には代わりに『神話思考 II』に所収の「縄文から見る——ネリー・ナウマンの日本宗教・神話研究」を提出した）。また本稿を執筆中のその頃に、小川英雄先生がほとんど重なるテーマの著書を出され、送ってくださった（小川 2003a）。その時はあえて意識的にそれを参照せずに書き進めようとした。参照すれば、影響されて、似たものとならざるを得ないと思ったからである（同様の理由から霜田 1980, 本村 2005 も参照しなかった）。小川先生はもう鬼籍に入られ、おられない。小川先生にも宗教史学研究所の研究会を通じて、20年以上もおつき合いいただき、拙い研究にも温かな励ましを頂いた。

2003年以降、多くの新しい研究も出されているので、今回はとりあえず理解できた範囲だがローマ宗教の流れの全体像を自分なりにまとめることに努めた。

参考文献

- Adkins, Lesley & Roy A. Adkins 1996: *Dictionary of Roman Religion*, New York: Facts On File.
- Altheim, Franz 1956: *Römische Religionsgeschichte*, I-II, Berlin: Walter de Gruyter.
- Ando, Clifford 2008: *The Matter of the Gods: Religion and the Roman Empire*, Berkeley: University of California Press.
- Ando, Clifford ed. 2003: *Roman Religion*, Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Athanassiadi, Polymnia and Michael Frede edd. 1999: *Pagan Monotheism in Late Antiquity*, Oxford: Clarendon Press.
- Bailey, Cyril 1932: *Phases in the Religion of Ancient Rome*, Berkeley: University of California Press.
- Bayet, Jean 1956: *La religion romaine : histoire politique et psychologique*, Paris : Payot.
- Beard, Mary & John North edd. 1990: *Pagan Priests: Religion and Power in the Ancient World*, Ithaca, New York: Cornell University Press.
- Beard, Mary, John North, and Simon Price 1998a: *Religions of Rome, vol.1 A History*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Beard, Mary, John North, and Simon Price 1998b: *Religions of Rome, vol.2 A Sourcebook*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Beck, Roger 1988: *Planetary Gods and Planetary Orders in the Mysteries of Mithras*, Leiden: E. J. Brill.
- Benko, Stephen 1984: *Pagan Rome and the Early Christians*, Bloomington, Indiana: Indiana University Press.
- Bidez, J. 1930: *La vie de l'Empereur Julien*, Paris : Les Belles Lettres.
- Borgeaud, Philippe 1996: *La mère des dieux: De Cybèle à la Vierge Marie*, Paris : Seuil.
- Bowersock, G. W. 1978: *Julian the Apostate*, London: Duckworth.
- パワーソック, G. W. (新田一郎訳) 1986: 『背教者ユリアヌス』 思索社
- Bremmer, Jan 1979: The Legend of Cybele's Arrival in Rome, in M. J. Vermaseren ed., *Studies in Hellenistic Religions*, Leiden: Brill, 9-22.

- Brown, Peter 1981: *The Cult of the Saints: Its Rise and Function in Latin Christianity*, Chicago: University of Chicago Press.
- Brown, Peter 1982: *Society and the Holy in Late Antiquity*, Berkeley: University of California Press.
- Brown, Peter 1978: *The Making of Late Antiquity*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- ブラウン, ピーター (宮島直機訳) 2002 : 『古代末期の世界——ローマ帝国はなぜキリスト教化したか?』 刀水書房
- ブラウン, ピーター (足立広明訳) 2006 : 『古代末期の形成』 慶應義塾大学出版会
- Charlesworth, Martin Percival 1935: Some Observations on Ruler-Cult Especially in Rome, *Harvard Theological Review*, 28-1, 5-44.
- Cumont, Franz 1903: *The Mysteries of Mithra*, Chicago: Open Court.
- Cumont, Franz 1911: *The Oriental Religions in Roman Paganism*, London: Routledge.
- Cumont, Franz 1922: *After Life in Roman Paganism*, New Haven: Yale University Press.
- キュモン, フランツ (小川英雄訳) 1993 : 『ミトラの密儀』 平凡社
- キュモン, フランツ (小川英雄訳) 1996 : 『古代ローマの来世観』 平凡社
- Digeser, Elizabeth DePalma 2000: *The Making of a Christian Empire: Lactantius & Rome*, Ithaca: Cornell University Press.
- Dodds, E. R. 1965: *Pagan & Christian in an Age of Anxiety*, Cambridge: Cambridge University Press.
- ドッズ, E. R. (井谷嘉男訳) 1981 : 『不安の時代における異教とキリスト教』 日本基督教団出版局
- Dumézil, Georges 1969 : *Idées romaines*, Paris : Gallimard.
- Dumézil, Georges 1973 : *Mythe et épopée III*, Paris : Gallimard.
- Dumézil, Georges 1974 : *La religion romaine archaïque*, Paris : Payot, (2^{ème} ed.)
- Dumézil, Georges 1975 : *Fêtes romaines d'été et d'automne*, Paris : Gallimard.
- デュメジル, ジョルジュ (松村一男訳) 1987 : 『神々の構造』 国文社
- デュメジル, ジョルジュ (大橋寿美子訳) 1994 : 『ローマの祭——夏と秋』 法政大学出版局
- Edelstein, Emma J. & Ludwig Edelstein 1998, *Asclepius: A Collection and Interpretation of the Testimonies*, I-II, Baltimore: The Johns Hopkins Press.
- Fauth, Wolfgang 1995: *Helios Megistos: Zur synkretistischen Theologie der Spätantike*, Leiden: E.J. Brill.
- Feeney, Denis 1998: *Literature and Religion at Rome: Cultures, Contexts, and Beliefs*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Ferguson, John 1970: *The Religions of the Roman Empire*, Ithaca, New York: Cornell University Press.
- Fowden, Garth 1993: *Empire to Commonwealth: Consequences of Monotheism in Late Antiquity*, Princeton: Princeton University Press.

- Fox, Robin Lane 1986: *Pagans and Christians*, Harmondsworth: Viking.
- Fowler, W. Warde 1899: *The Roman Festivals of the Period of the Republic: An Introduction to the Study of the Religion of the Romans*, London: Macmillan.
- Fowler, W. Warde 1911: *The Religious Experience of the Roman People: From the Earliest Times to the Age of Augustus*, London: Macmillan.
- Frazer, J. G. 1890: *The Golden Bough: A Study in Magic and Religion*, London: Macmillan.
- Frankfurter, David 1998: *Religion in Roman Egypt: Assimilation and Resistance*, Princeton: Princeton University Press.
- Geffcken, Johannes 1978: *The Last Days of Greco-Roman Paganism*, New York: North-Holland Publishing Company.
- Glover, T. R. 1909: *The Conflict of Religions in the Early Roman Empire*, London: Methuen.
- Gordon, Richard 1996: *Image and Value in the Graeco-Roman World: Studies in Mithraism and Religious Art*, Hampshire, Great Britain: Variorum.
- Grant, Frederick C. 1957: *Ancient Roman Religion*, Indianapolis: Bobbs-Merill.
- Grant, Robert M. 1970: *Augustus to Constantine: The Thrust of the Christian Movement into the Roman World*, New York: Harper & Row.
- Grenier, Albert 1925: *Le génie romain dans la religion, la pensée et l'art*, Paris : La Renaissance du Livre.
- 半田元夫 1970 : 『キリスト教の成立』 近藤出版社
- 本村凌二 2005 : 『多神教と一神教——古代地中海世界の宗教ドラマ』 岩波新書
- Hopkins, Keith 1999: *A World Full of Gods: Pagans, Jews and Christians in the Roman Empire*, London: Weidenfeld & Nicholson.
- ホブキンズ, キース (小堀馨子・中西恭子・本村凌二訳) 2003 : 『神々にあふれる世界——古代ローマ宗教史探訪』 上下, 岩波書店
- 保坂高殿 2003 : 『ローマ帝政初期のユダヤ・キリスト教迫害』 教文館
- 保坂高殿 2005a : 『ローマ史のなかのクリスマス——異教世界とキリスト教 1』 教文館
- 保坂高殿 2005b : 『多文化空間のなかの古代教会——異教世界とキリスト教 2』 教文館
- 市川裕 2009 : 『ユダヤ教の歴史』 山川出版社
- 井上文則 2010 : 「アウレリアヌス帝の「太陽神」崇拝」, 『古代文化』 62-3, 90-96
- ジャンメール, アンリ (松村一男他訳) 1991 : 『ディオニューソス——バッコス崇拝の歴史』 言叢社
- 風間喜代三 1993: 『印欧語の故郷を探る』 岩波新書
- クラウク, H.-J. (小河陽監訳) 2017 : 『初期キリスト教の宗教的背景』 上下, 日本キリスト教団出版局
- 小堀馨子 1997 : 「アウグストゥスの宗教復興」の再検討」, 『宗教研究』 71-3, 529-552.
- 小堀馨子 2003 : 「古代ローマの太陽神——帝政期前期」, 松村一男・渡辺和子編『太陽神の研究』 下巻, 151-169.
- ケスター, ヘルムート (井上大衛訳) 1989 : 『新しい新約聖書概説 上——ヘレニズム時代の歴史・

文化・宗教』新地書房

- König, Angelika and Ingemar 1991: *Der romische Festkalender der Republik: Feste, Organisation und Priesterschaften*, Stuttgart: Reclam.
- Kraemer, Ross Shepard 1992: *Her Share of the Blessings: Women's Religions among Pagans, Jews, and Christians in the Greco-Roman World*, Oxford: Oxford University Press.
- Kuefler, Mathew 2001: *The Manly Eunuch: Masculinity, Gender Ambiguity, and Christian Ideology in Late Antiquity*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Latte, Kurt 1960: *Römische Religionsgeschichte*, München: Beck.
- Leach, Edmund 1990: Aryan Invasions over Four Millennia, in Emiko Onuki-Tierney ed., *Culture through Time: Anthropological Approaches*, Stanford: Stanford University Press, 227-245.
- Lee, A. D. 2000: *Pagans & Christians in Late Antiquity: A Sourcebook*, London: Routledge.
- Liebeschuetz, J. H. W. G. 1979: *Continuity and Change in Roman Religion*, Oxford: Clarendon Press.
- MacMullen, Ramsay 1981: *Paganism in the Roman Empire*, New Haven: Yale University Press.
- MacMullen, Ramsay 1984: *Christianizing the Roman Empire A.D. 100-400*, New Haven: Yale University Press.
- MacMullen, Ramsay 1988: *Corruption and the Decline of Rome*, New Haven: Yale University Press.
- 松村一男 1980a : 「古代イタリア宗教の源流」, 『宗教研究』 246, 355-356.
- 松村一男 1980b : 「王政期ローマ宗教の再検討」, 『時と人と学と』 東京大学宗教学研究室, 211-234.
- 松村一男 2001 : 「比較神話学の方法論を考える——アッティス神話を例に」, 科研報告書 (松村一男 2010 所収)
- Matsumura, Kazuo 2003: "The Rise, Fall and Transformation of Daimon Worship", *Iris* 25, 91-95.
- 松村一男 2004 : 「異教のダイモンからキリスト教のデーモンへ」, 『アジア遊学』 59, 19-25 (松村一男 2010 所収) .
- 松村一男 2010 : 『神話思考 I 自然と人間』 言叢社
- 松村一男・渡辺和子編 2003 : 『太陽神の研究』 下巻, リトン
- 松本宣郎 2017 : 『ガリラヤからローマへ——地中海世界をかえたキリスト教徒』 講談社学術文庫
- Michels, Agnes Kirsopp 1967: *The Calendar of the Roman Republic*, Princeton: Princeton University Press.
- 中西恭子 2003 : 「帝政後期ローマの皇帝たちと太陽神——ソル・インウィクトゥス信仰を中心に」, 松村一男・渡辺和子編『太陽神の研究』 下巻, リトン, 170-182.
- 中西恭子 2016 : 『ユリアヌスの信仰世界——万華鏡のなかの哲人皇帝』 慶應義塾大学出版会
- Nock, A. D. 1933: *Conversion: The Old and the New in Religion from Alexander the Great to Augustine of Hippo*, Oxford: Oxford University Press.
- 小川英雄 1979 : 「ローマ帝国への古代オリエン特宗教の流入」, 『オリエン特』 22-1, 21-30.

- 小川英雄 1993 : 『ミトラス教研究』 リトン
- 小川英雄 2003a : 『ローマ帝国の神々——光はオリエントより』 中公新書
- 小川英雄 2003b : 「ミトラスの密儀と太陽神」, 松村一男・渡辺和子編『太陽神の研究』下巻, リトン, 183-202.
- Pallottino, Massimo 1942: *The Etruscans*, London: Pelican Books.
- Parke, H. W. 1988: *Sibyls and Sibylline Prophecy in Classical Antiquity*, B. C. McGing ed. London: Routledge.
- Poultney, James Wilson 1959: *The Bronze Tables of Iguvium*, Baltimore: American Philological Association.
- Price, S. R. F. 1984: *Rituals and Power: The Roman Imperial Cult in Asia Minor*, New York: Cambridge University Press.
- レンフルー, コリン (橋本楨矩訳) 1993 : 『ことばの考古学』 青土社
- Roller, Lynn E. 1999: *In Search of God the Mother: The Cult of Anatolian Cybele*, Berkeley: University of California Press.
- Rose, H. J. 1948: *Ancient Roman Religion*, New York: Hutchinson's University Library.
- Rüpke, Jörg 1995: *Kalendar und Öffentlichkeit: Die Geschichte der Repräsentation und religiösen Qualifikation von Zeit in Rom*, RGTV 40, Berlin: de Gruyter.
- Rüpke, Jörg 2014: *Religion: Antiquity & Its Legacy*, London: I. B. Tauris.
- Rüpke, Jörg 2018: *Pantheon: A New History of Roman Religion*, Princeton: Princeton University Press.
- Rüpke, Jörg ed. 2011: *A Companion to Roman Religion*, Oxford: Wiley-Blackwell.
- Scheid, John 1985: *Religion et piété à Rome*, Paris : Éditions la Découverte.
- Scheid, John 1998: *La religion des Romains*, Paris : Armand Colin.
- Schultz, Celia E. and Paul B. Harvey, Jr. edd. 2006: *Religion in Republican Italy*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Scullard, H. H. 1981: *Festivals and Ceremonies of the Roman Republic*, London: Thames & Hudson.
- シュタイングレーバー, シュテファン編 2000 : 『死後の礼節——古代地中海圏の葬祭文化 紀元前7世紀-紀元前3世紀』 東京大学出版会
- 霜田美樹雄 1980 : 『キリスト教は如何にしてローマに広まったか』 早稲田大学出版部
- Stark, Rodney 1996: *The Rise of Christianity: A Sociologist Reconsiders*, Princeton: Princeton University Press.
- スターク, ロドニー (穂田信子訳) 2014 : 『キリスト教とローマ帝国——小さなメシア運動が帝国に広がった理由』 新教出版社
- Turcan, Robert 1996: *The Cult of the Roman Empire*, Oxford: Blackwell.
- Turcan, Robert 2000: *The Gods of Ancient Rome: Religion in Everyday Life from Archaic to Imperial Times*, Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Turcan, Robert 2003 : *Liturgies de l'initiation bacchique à l'époque romaine*, Paris : Boccard.

- Ulansey, David 1989: *The Origins of the Mithraic Mysteries: Cosmology and Salvation in the Ancient World*, Oxford: Oxford University Press.
- Vermaseren, Maarten J. ed. 1981: *Die Orientalischen Religionen im Römerreich*, Leiden: E. J. Brill.
- フェルマースレン, M. J. (小川英雄訳) 1973 :『ミトラス教』山本書店
- フェルマースレン, M. J. (小川英雄訳) 1986 :『キュベレとアッティス——その神話と祭儀』新地書房
- Wagenvoort, H. 1947: *Roman Dynamism*, Oxford : Basil Blackwell.
- Warrior, Valerie M. 2006: *Roman Religion*, Cambridge: Cambridge University Press.
- ワイズマン, D. J. 編 (池田裕訳) 1995:『旧約聖書時代の諸民族』日本基督教団出版局
- Wissowa, Georg 1912: *Religion und Kultus der Römer*, München: Beck.
- Witt, R. E. 1971: *Isis in the Ancient World*, Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- Woodard, Roger D. 2013: *Myth, Ritual, and the Warrior in Roman and Indo-European Antiquity*, New York: Cambridge University Press.
- 山形孝夫 1976 :『レバノンの白い山——古代地中海の神々』未来社
- 吉田敦彦監修 2005 :『比較神話学の鳥瞰図』大和書房

The Clash of Gods in Ancient Rome

Kazuo MATSUMURA

Religious situations in Rome are very complicated. The city experienced three different forms of government during the regal period, the republican period, and the imperial period. Its religious situations in the regal period, which lacks historical documents, can be reconstructed by comparison with the documents of other Indo-European branches. Combining the ritual calendars and documents recorded by antiquarians, its religious situations in the republican period could be accurately described. As the Roman Empire holds vast territories extending from the British Isles in the west to the Pontic in the east and from Germania in the north to North Africa in the south, the Roman religious situations are hard to summarize. The Empire has many different kinds of religions, the imperial cult of emperor worship, many mystic cults such as the Dionysiac, Eleusinian, and Mithraic, and Judaism as well as Christianity. Although the history of Roman religions has been a traditional branch of the history of religions since the beginning of the discipline, not many have attempted to construct a bird's-eye view starting from the regal period down to Christianization. This modest paper is an attempt to present the author's personal view on how Roman religions transformed themselves from the period of a city of seven hills to the period when the Romans called the Mediterranean "Mare Nostrum," meaning "Our Sea."